



震災ボランティア



TAKA

死だ。

時間も、場所も、関係ない。

過ぎ去ってもいない。終わってもいない。

人々の悲鳴が、恐怖が、絶望が、孤独が、消え去ってしまった人々の感情が、そこに立てばよみがえってくる。

あの瞬間、 死がやって来たのだ。

津波の映像

僕はその町のことを何も知らない。

テレビで津波の映像を見た。

建物が壊れ、家が土台ごと波にさらわれていく映像を見た。

車が何台もオモチャのように流されていく映像を見た。

津波が次々と家を飲み込み、田畑を飲み込み、道路を、橋を、町を飲み込んでいく映像を見た。

テレビの前で、必死で人々の姿を探した。

早く逃げて欲しい。逃げ切って欲しい。助かって欲しいと願った。

その時、何万人という人が、命をうしなった。

そしてその何倍もの人々が、家を失い、財産を失い、思い出を失い、大切な人を失った。

日本が、世界が、たくさんの人々が、その恐ろしさに戦慄し、被害の大きさに呆然とし、悲しみに沈んだ。

それでも、まだ助かる、助けることのできる人々を救うために、泥とガレキをかき分け、必死に捜し、同時に自分達も生きていく、無我夢中の日々が被災地では始まっていた。

僕が被災地に立ったのは、その2ヵ月後のことだ。

長靴を履き、カッパを着て被災地に立った。

それまでの2ヶ月、テレビで報道されていた被災地の様子。目の前にはまさにそのままの景色が広がっている。

土台しか残っていない家。あちこちに転がっているつぶれた車。町の中に唐突に姿をあらわす打ち上げられた漁船。流されてたどりつき、傾いたままになってしまった家。その2階の壊れた窓からは子供部屋らしく机やその上に置かれた教科書が見えている。そしてあたり一面には大量のガレキ。そのくせ、家々が流されてしまったので、まるで荒野のようにどこまでも見渡すことができる。

津波が何もかも持って行ってしまった...

魂の一部まで...

心がカケてしまったみたいだ。

言葉になんかできない。

感情なんかじゃ表現できない。

確かなことは、自分の心臓がまだ動いているってこと。

まだ生きているってこと。

まだ手足の動く人間がここにいる。

ガレキを片付け、泥を出し、袋に詰めて運び出す。

やるべきことはいっぱいある。

かつての持ち主の思い出がつまった品を見つけると、大切に取り出しキレイにしようとするのだけれど、手袋をした手じゃ泥をぬぐってもまた泥がついてしまう。水道も電気もまだ復旧していない。それでも泥のついた手袋のまま、少しでもキレイにしようとする。少しでもキレイに

10人が1日かかって一つの家が終らない。

この家は、何百とあるこの町の家の一軒にすぎない。

砂浜の砂のひとつみたいなものだ。

しかもこの砂浜は、山を越えれば隣の県まで、いやその隣の隣の県まで続いているのだ。

それでもガレキを片付け、泥を出し、袋に詰めて運び出さなくてはならない。

少しでもキレイに。できるだけ、少しでもキレイに...

巨大な漁船

用水路のガレキとヘドロの撤去。

ヒザまで泥に埋まりながら、水を含んで重くなった泥をスコップでかき出す。

漁業用の網から、衣服、屋根瓦、カーテンのレール、金属製の管に、植木や家電、日用品から雑誌、写真や表彰状まで流れ込んでいる。

一番やっかいなのはシャツやズボンで、水を吸い込み、泥にまみれ、広がってからまってしまった服はちょっとやそつとでは持ち上がらない。

ガラスやクギの出た木材もある。踏み抜けば大ケガだ。

海から流れてきた貝が腐って強烈なニオイを出している。

他の場所で2ヶ月放置されていた腐ったサンマの回収を担当したボランティアは、現場で何度も吐いたという。

ヘドロには細菌が繁殖している可能性が高く、汚れても洗い流せるように作業は防水性のあるカップなどを着用して行われるが、これが暑い。土が舞い上がり呼吸器系を痛める人もいるので、防塵メガネとマスクも欠かせない。すぐに汗だくになる。水で顔を洗いたくなるが水道はまだ復旧しておらず水は貴重品。気分の悪くなるボランティアも出る。それでも作業は続けられる。無理はしない。休憩もたっぷり取る。水分も補給する。誰かに強いられているわけではない。誰かがやらなくちゃいけないことだから。

その現場からは遠くに海が見える。

おだやかで青い海。5 kmは離れているだろうか。

ところどころで動いているパワーショベルなどの重機がオモチャのように小さく見えている。

ふと振り返る。

海から5 kmは離れたこの場所。目の前の田んぼに横たわっているのは巨大な漁船だ。

ここまで流されて来たのだ。

ガレキは、さらに陸の奥へと続いている。

ガレキを運ぶトラックがひっきりなしに通り過ぎて行く海岸沿い。

何とか姿を保っている松林を抜けて堤防に出る。

コンクリートの土台はところどころ陥没し、まるで板のように一部分だけが持ち上がり、大きく突き出しているところもある。

ひしゃげた乗用車の横を通り過ぎ、松の木のかなり上にひっかかった衣類を見上げながら、海を見下ろすことのできるところまで来ると、波打ち際にプロパンガスのボンベが浮いているのが見えた。

それ以外はきれいな海だ。

堤防の続く先をながめると、遠く海の中に見えるコンクリートの残骸はかつての堤防のなれの果てだろう。反対側は入り江になっていて、ガレキの山が続いている。

その海岸に一羽のはぐれカラスがいる。

人間を恐れるどころか、まるで襲いかかるように低く飛び、さかんに高い鳴き声で鳴く。少しも落ち着いてはいない。松の木や建物の屋根の間をさかんに飛び回って鳴き叫び、人間やトラックにぶつかりそうなくらい低く飛ぶ。まるでこの惨状が人間やトラックのせいだといっているかのように。

狂っている。

カラスが狂っているのか、狂ってしまった何かをカラスが正そうとしているのかそれはわからないが、確かに何か狂ってしまったのだ。

その海岸には震災発生当初、避難所として使われた建物が残っている。

今は誰もいない。別の安全な避難所に移っていったのだ。それでも誰かが訪ねて来た場合に備えて、おそらく近所の人たちなのだろう、何家族もの名前が書かれた消息を知らせる張り紙が残されていた。

別の避難所に移った人。避難先の連絡先が書かれた人。だがそれはほんのわずかでしかなく、大半の人の名前の横には「行方不明」と書かれている。

そして、そのうちのかなりの人々は、中には一家族すべて、「行方不明」の文字が訂正され、こう書き直されていた。

「死亡確認」

この張り紙が被災地の現実なのだ。

運ばれるガレキの一つ一つに人々の生活があり、松の木にひっかかった服の一つ一つに持ち主がいて、この張り紙の名前の一人一人にかけがえのない人生があったのだ。

またカラスが悲しげに鳴き、トラックに向かって滑空して行く。

ネコと呼ばれる一輪車で泥や土砂を運ぶ。

何度も何度もくり返し運ぶ。

終わりはない。

誰もそんなことは考えない。

春から通うはずだった学校が津波で流されてしまい「ヒマだから自分みたいなのがボランティアに来ないと」と語った青年。

「あの時何もできなかったから」と阪神大震災で被災した時のことを語ってみえた神戸から来た団体。

テレビで被災地の様子を見て、いてもたってもいられず「自分にも何かできないか」と初めてボランティアに参加した神奈川の女性。

親子で参加した8歳になる女の子。

還暦を過ぎた方。

作業はつらく、泥とガレキと格闘する中でも、みんな声をかけあい、励まし、お互いを気遣いながら果てしない力仕事に取り組んでいく。

時には手渡しで荷物を運ぶ。

支援物資を仕分けする。

被災者の方に怒られることもある。

優しい声をかけてもらえることもある。

感謝の言葉には恐縮する。

僕たちの力は本当に微力で、この巨大な災害の前ではゾウに立ち向かうアリでしかない。

それでも前に進むしかない。

いま傷ついている人がいる。

僕たちの力は小さいけれど、せめて医者が来るまで、傷口を押さえておく。

それしかできない。

あふれる血が少しでも少なくなるように押さえることしかできない。

いま、8歳の女の子から、おじいさん、OL、サラリーマン、学生まで、たくさんの人が手を差し出してその血を止めようとしている。

みんな自分も血にまみれながら、必死で押さえ続けている。

治す力はない。だから早く医者に来て欲しい。

大きなガレキを片付ける重機が足りない。水が足りない。電気が足りない。お金が足りない。法律が足りない。これからどうなるのかという展望が足りない。悲しんでいる人の話を聞く耳が足りない。子供たちを優しく包む膝が足りない。お年寄りに貸す肩が足りない。人々をつなぐ足が足りない。人手が全然足りてない。

泥まみれになり、血まみれになり、傷口を押さえ続ける。

助けて下さい。

早く助けて下さい。

僕たちは被災地の傷口を押さえながら、待ち続ける。

医者はどこに行ったんだ！？

被災地と呼ばれる町から車で1時間ほど走ると、そこにはもう普通の生活がある。

普通に電車が走り、電気も水も使え、買い物もできる。

朝になると駅に向うサラリーマンや制服を着た中学生も普通に見かける。

田んぼで農作業をする人、川で魚釣りをする人。違うといえば自衛隊や警察、消防の車両がやたらと走っていることぐらいだ。

ここから海に向い、山をひとつ越えた先に、ガレキの山が広がっている。

この落差が落ち着かない。

人が死んだというのに、たくさんの方が死んだというのに、空が青く、白い雲が浮かんでいて、人々が楽しそうに暮らしているのがうまく受け止められない。

僕はいま、被災地を離れて自分の町に帰ろうとしている。

自分の中に整理できないものがあって、それを整理できないまま、抱えて帰ろうと思っている。

変にわかったふりをしたくない。

無理矢理整理して自分の心をダメしたくない。

きっと抱えきれるようなことじゃないと思うから。

だからこそ、まずは自分にできることをしたいと思っている。

生きていこう、と思っている。

生きる意味なんて僕にはわからないけれど。

とりあえず、生きてみよう。

こんなに空が青くて、こんなに雲が白いのだから。

被災地の皆さん、わずかな期間しかお手伝いできなくてすみません。

何も終わっていないのはわかっています。

たいした役にも立てなくて、本当にゴメンナサイ。

さいごに

2011年の5月の中旬から1週間ほど、岩手県で震災ボランティアとしてお手伝いさせていただきました。その時の体験をもとに書きました。ただ読みやすくするために、ボランティアの現場で耳にした話や新聞などの報道も参考にしています。創作はありませんがすべてが私自身が体験したことではありません。被災地で他のボランティアさんが話していたのを耳にした、というような内容も含まれています。どうかご了承下さい。

自分なりに感じたことを書いたつもりですが、中には不愉快に感じた方がいらっしゃるかも知れません。特に「死」という言葉を使うにあたり、被災者の方の心情を考えると不謹慎と思われる方がいらっしゃるかも知れません。私もそこは悩みましたが、現地の惨状を伝えるのに、それ以上の言葉をみつけることができませんでした。決して亡くなられた方やそのご家族に対し、不敬の気持ちで書いたのではないことだけをご理解下さい。

さいごに、今回の東日本大震災で亡くなられた方のご冥福を心よりお祈り申し上げるとともに、被災され、困難な生活を余儀なくされている方々に、謹んでお見舞いを申し上げます。被災地の一日も早い復興を心から願っております。

2011年、6月12日。 TAKA

震災ボランティア

<http://p.booklog.jp/book/27837>

著者：TAKA

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hakwsbook/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27837>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27837>